

## ニガウリ品種‘熊研B P 1号’の最適な着果数

林田慎一・○岩本英伸<sup>1)</sup>・小野誠  
(熊本農研セ・<sup>1)</sup>熊本農研せい業)

### 【目的】

ニガウリは消費需要が高まり、本県においても栽培面積が増加しているが、本格的に導入されて歴史が浅く、地域により栽培方法も異なる。一方、本県で育成した新品種‘熊研B P 1号’は安定して高い雌花着生を有するが、着果数が過多になると着果負担を生じ、生育不良を引き起こすことがある。そこで、本試験では本県慣行整枝法において、着果負担による草勢低下を抑えながら、最も多収となる適正着果数を明らかにするため、異なる間隔で着果処理を行い、どの程度の着果数が適当であるのか検討した。

### 【材料および方法】

本県育成ニガウリ品種‘熊研B P 1号’を供試し、2006年2月17日にガラス温室内に定植した。子づる3本を主枝として伸ばし、孫づるは全て摘除する本県慣行の整枝法で栽培した。4月6日から人工受粉による着果処理を開始し、着果数を6.5節、5節および4節あたりに1果とする区、さらに、開花雌花のほぼ全てに人工受粉を実施する全処理区の4区を設けて試験を行った。試験は1区4株2反復で実施した。収穫は4月23日から7月31日まで250gを基準に行い、100g以上を収穫果とした。また、果皮が黄化した果実は収穫基準に満たなくとも収穫した。着果節位、人工受粉日および収穫日を全株の全つるで記録し、果実の重量や品質を調査した。

### 【結果および考察】

総収量は、果数・重量ともに4節区が最も優れ、次いで5節区であった(第1表)。可販果における収穫までの平均日数は着果数が最も少ない6.5節区が15.0日と最も短く、全処理区の19.9日が最も長かった。可販果率は6.5節区が最も高かったが、5節区および4節区と比べて大きな差は無く、全処理区は68.2%と大きく劣った。可販果一果重は、着果数が少なくなるほど重かった。可販果収量は4節区が最も多く、次いで5節区、6.5節区の順であり、全処理区は4月は他区と同程度以上であったが、5月以降は他区より少なかった(第1図)。可販果率が低く、外品収量が多かった全

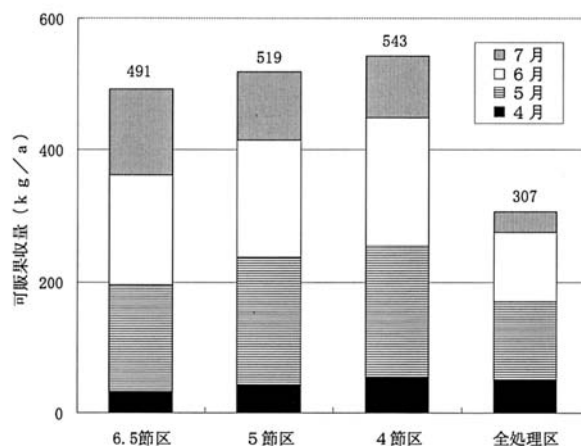
処理区の外品収量の内訳は、過熟果が他区に比べて非常に多く発生しており、短形果や変形果の発生も多かった(第2図)。

以上のことから、‘熊研B P 1号’を用いた半促成栽培では最も収量性に優れた4節に1果の着果を目安にし、天候等を考慮しながら着果数を減少させる方法が適当であると考えられる。全処理区では着果負担が増加し果実肥大が鈍くなったため、収穫基準に達するまでの日数が長くなり過熟果が多く発生したと推察される。

第1表 着果割合が収量性に及ぼす影響

区	総収量		可販果 収穫まで 日数 <sup>2)</sup>	可販果率 重量 (%)	可販果 一果重 (g)
	果数 (果/a)	重量 (kg/a)			
6.5節	1,910	499	15.0	98.5	263
5節	2,110	536	16.0	96.8	258
4節	2,227	562	16.5	96.6	256
全処理	2,045	451	19.9	68.2	243

<sup>2)</sup> 人工受粉から収穫までの日数(全可販果対象)



第1図 着果割合と時期別可販果収量の関係

第2表 着果割合と外品収量の内訳 (果, kg/a)

区	短形果		変形果		曲がり果		過熟果 <sup>2)</sup>	
	果数	重量	果数	重量	果数	重量	果数	重量
6.5節	10	1	35	6	35	6	0	0
5節	60	11	30	5	30	5	5	1
4節	40	7	28	5	28	5	35	7
全処理	175	29	120	19	120	19	480	94

<sup>2)</sup> 種子の周囲(種衣)が着色している果実を含む